

古川渡村

〔都 留 市〕

現在の古川渡地域の姿は、江戸時代の古川渡村と大幅に変わってしまった。その原因の一つは明治三十九年（一九〇六）東京電力駒橋発電所の起工にともない、村内に作られた導水路であり、他は明治十年代の国道一三九号線と、昭和四十四年に開通した中央高速道路富士吉田線の村内縦断であった。しかし、いまこの古川渡村の村絵図をみると、江戸時代の村の姿をふたたび目の当りにすることができる。

古川渡村の村名由来は、橋が架けられる以前、桂川から対岸に渡る船での渡し場のあったところという説と、「ふるこうど」と読み、郡家の古代所在地であったという説とがある。古川渡の文献上の初見は、長生寺文書の小山田氏寄進安堵状で、そこに「古河渡」とみえる。

本村は、西から東北に流れる桂川と、南から東北に流れて桂川に合流する小野川とに挟れた舌状の台地上に位置する。こうした立地から、南西四日市場村とは地続きで境を接しているものの、他の二方はいずれも河心で隣村と境を分けている。村絵図にある通り、桂川川幅三〇間のうち一五間をもって川茂村に接し、小野川川幅一〇間のうち五間をもって井倉村に接している。そして、二川をへだてる川茂・井倉両村との連絡は、そこにかけられた橋によっており、桂川をへだてて川茂村に対して本村が、また小野川をへだてて井倉村に対して枝郷前久保があることもわかる。

この村域には、小野川と桂川に落ちる二系統の用水によって灌漑されていることも、この村絵図は端的に示している。この村絵図の南西（右）側に、四日市場村の村絵図をならべてみると、古川渡村の用水がそこに連続する様子が明らかになる。それは、谷村大堰からのものが、四日市場村内で分岐して古川渡村に至っている。そして、一本は本村を潤わせて桂川へ、もう一本は枝郷前久保を潤わせて小野川に落ちる。本村と枝郷とは水系を異にしていることも、この村絵図からは読みとることができる。

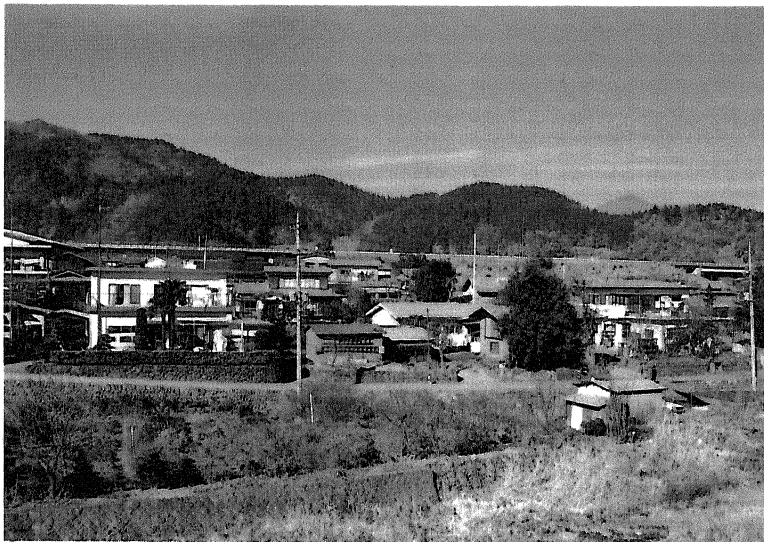
またこの用水によって水田が開かれ、郡内でも有数の水田地帯となっていることもわかる。郡内の村々では畑勝ちであることが一般的であるのに、ここ古川渡村では畑の少いことが特色となっている。畑は桂川の河岸段丘上の水利の悪い子ノ神・本村北側・黒柏の三か所と、小野川沿いでは東陽院南西部・前久保東部から落合にかけてのみである。このことは、村高に具体的に示されている。つまり、村高三二石余のうち、田高二三五石余、畑高五六石余と、畑高はわずかに一・八パーセントを占めるにすぎない。それは、郡内惣高約二万九〇〇石中畑高六万三四〇〇石、六四パーセントが畑高とする平均値を極端に下まわる数値であった。

こうした耕地条件に恵まれた村ではあったが、一戸当りの平均所持石高は四石に満たないわずかなものであり、そうした耕地での稲作を中心とした農業のみでは生活をささえることができなかった。それを補完する稼ぎとして、この地域の他の村々同様、機織りが重要な位置を占めていたことは想像に難くない。

『甲斐国志』には、「四方山ヲ絶」と記しているように、この村には山がない。そのかわり、谷村大堰の末流



古川渡の集落



前ヶ久保の家並

が数筋の流れをつくって地内を潤し、水田面積を広げている。土地のごとくに「田」の字が記入され、「畑」と見えるのはわずかしかない。薪・萱・秫・柴などは周辺の村に入会を持っていて採取していた。例えば享保十三年（一七二八）の「朝日馬場村反別差出帳」にも、また文化三年（一八〇六）の「旧所書上帳」にも、山手大豆を古川渡から取り、朝日馬場村のうちの「ミかけ」「まか久保」「高橋」の山に入会させていたことが記されている。また、九鬼山への入会権も有していた（近藤家文書）。

道路については、他村の絵図と比べるとかなり細かく描かれているといえよう。道路の太さが同じであるので、主要道と他との区別はつかない。谷村方向と大月方向を結ぶいわゆる富士道は「小野川」にかかっている橋（現在の宮川上橋）を渡って小野川（現称菅野川）沿いに南進し、「東陽院」の裏を通過して現在の字中島の集落に至り、用水沿いに南進して四日市場村境へとつながるのがそれである。

井倉村―古川渡村―川茂村を結ぶ線は、小野川を渡ったところで、左右への分れ道を川下の方に曲ると、すぐ丁字形に分れる道があり、あとはほぼ直線で川茂村方向へ延びているが、現在は絵図にある小野川にかかっている橋の川しにも、別に橋が架けられ、宮川橋と名付けられ、国道から井倉―朝日曾雌―秋山村―上野原町を結ぶ国道四日市場・上野原線が通っている。

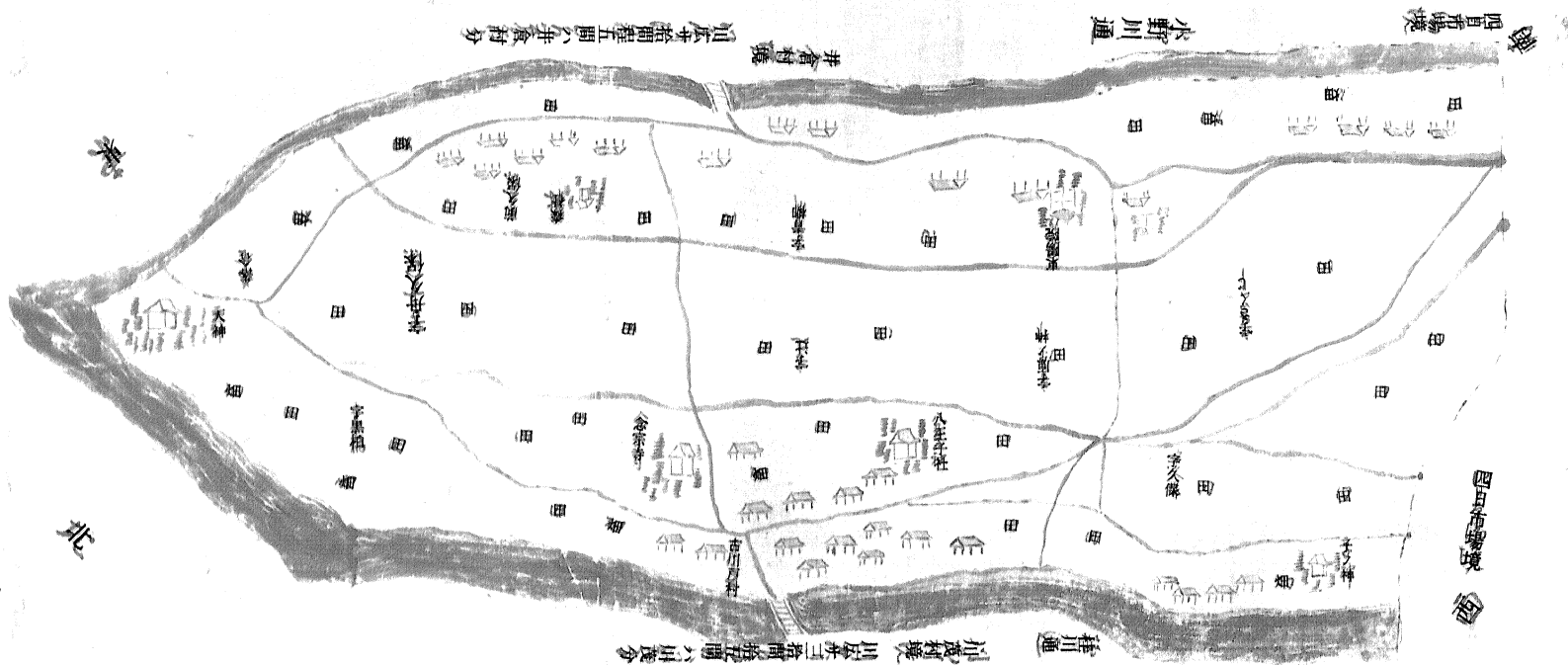
ところで現在の国道一三九号線は、「天神」社の東側から「字舟久保」と書かれた字のあたりを通り、「前ヶ久保」で井倉と川茂を結ぶ道路と用水との交点近くを通り用水沿いに南進している。中央自動車道は、川茂村坪松からの架橋で、「字黒柏」と見えるあたりに渡り、用水路沿いに「念宗寺」の上あたりへ出、ほぼ中央部を南進している。国道との中間を富士急行線が走っているとみればよい。

社寺の類としては絵図に二か寺四社が見えるが、まず寺としては、古川渡の母郷で井倉村と川茂村を結ぶ道の脇、すなわち現在の禾生駅裏手に岩光山念宗寺が描かれている。この寺は谷村長安寺の末寺であるが、現在は小堂を残すのみで、境内は児童公園となっている。一方、日出山東陽院は、金井の桂林寺末寺で、井倉村と四日市場村を結ぶ往還沿いに見えるが、現在はこの寺の北西を国道一三九号線が通っており、東陽保育園を経営している。

神社は、桂川と小野川が落ち合う付近に「天神」がみえる。この天神社には珍しく少彦名命を祀り、地名から落合天神社の別称がある。

「前ヶ久保」にある「森社」は、現在、金山神社と称している。古川渡母郷にある八王子社は母郷だけの氏神として現存している。なお、西と記された近くには「子ノ神」があるが、現在はこの付近が東京電力の発電所用地となっており、祭礼などは東京電力が行っているという。また、神社名の記入はないが、東陽院の右横に神社様の建物が描かれているが、これは中島の熊野権現であるろう。

『甲斐国志』にみられる文化三年（一八〇六）の家数は九一戸、人口は三四四人（男一八五・女一五九）、馬二五疋を数える村であった。しかし、明治十年代に国道が開通し、その両脇に新しい家並が出現し、また禾生駅と禾生村役場、禾生郵便局、そして小学校・中学校が置かれたことにより、国道沿いは禾生村の中心地として発展してきた。そして現在もなお、地内は住宅地として順次田園が変貌しつつある。



御旗台付古川戸村絵図奉書上候

石色沢

● 川
● 道

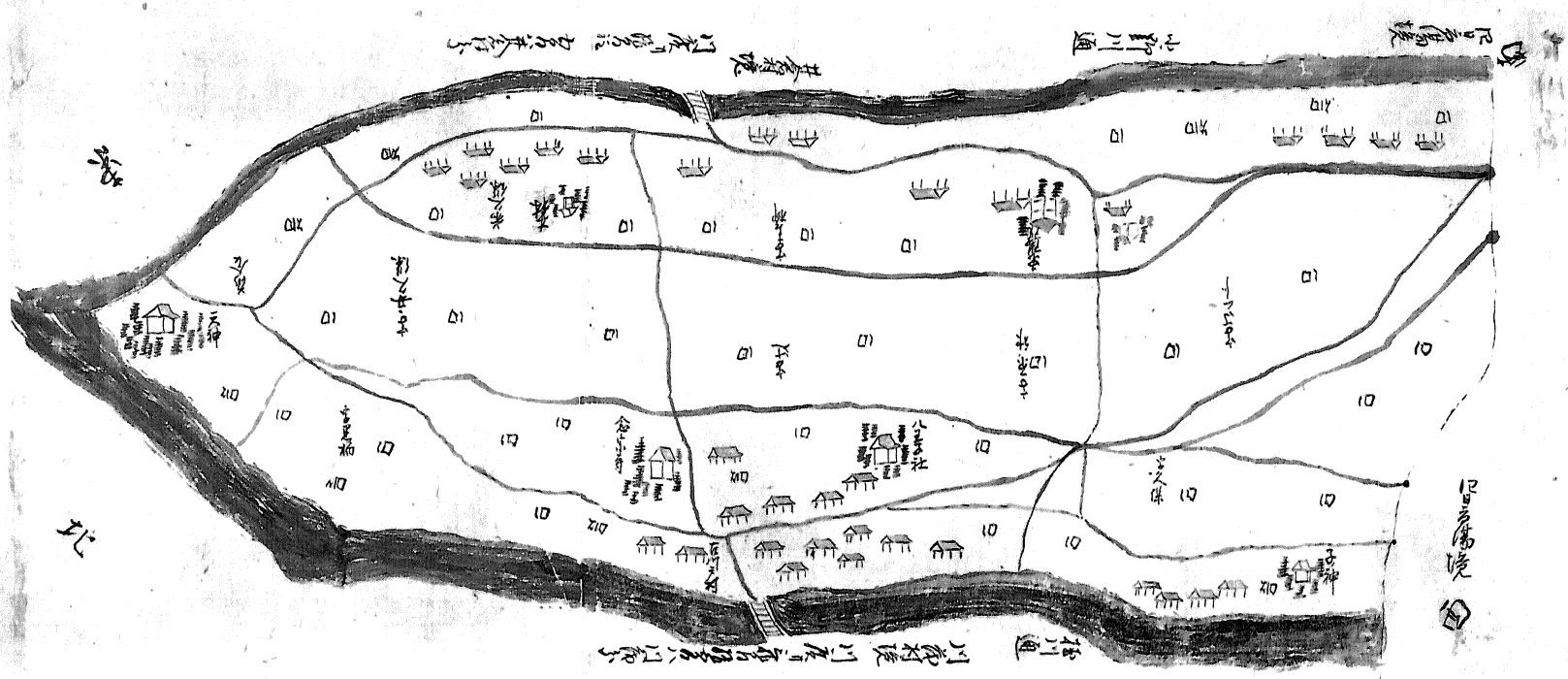
古川戸村

古川渡村繪圖

左記

道

川



20 [文化3年](1806) 古川渡村繪圖 都留市蔵(森嶋家文書) 320×860